【344】

氏　名（本籍）	内山幸子（静岡県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2090　号
学位授与年月日	平成17年2月28日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**海獣狩猟文化における動物飼養の研究** －続縄文・オホーツク両文化に見るその変遷と意義－

主　査	筑波大学教授	博士（日本史学）	前田　潮
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	常木　晃
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	浪川健治
副　査	早稲田大学教授	文学博士	菊池徹夫

論文の内容の要旨

紀元後の北東アジア沿岸地域においては，銛猟の技術的発達を軸に海獣狩猟文化の顕著な発達が見られた。これとともに日本を含む周辺古代国家群との交易を中心とするネットワークが成立している。一方，この種の文化集団の間では，動物飼養ないし飼育をその生業体系のうちに採用するものが多く見られる。本論文は，このような特徴の明確な例として北海道からサハリンにわたる地域に展開した続縄文，オホーツク両文化をとりあげ，従来注目の薄かった海獣狩猟文化の発達と動物飼養（イヌ，イノシシ類等）の変遷過程の相関関係について動物考古学的分析を通して明らかにすること，およびそれを踏まえてこの種の文化集団における動物飼養の意義を究明することを目的としている。論文は，序章，第1章より第6章の各章，終章から成っている。

「序章」では，北東アジア沿岸地域における海獣狩猟社会の発達，維持において動物飼養が重要な役割を果たしてきたことを説く。すなわち，著者は従来海獣狩猟活動の発達を金属器の採用による水産資源の捕獲の効率化という技術的観点にとらわれがちであったとし，サハリン・北海道沿岸地域では水産資源への依存度の強い生業体系の中に動物飼養を採用し，一般の狩猟採集文化より安定した生活様式を成立させている点に注目した。そして，経済の複合性を強めることによって厳しい自然環境下における生活の安定維持を図るという戦略的意味を認め，本研究の見通しとしている。

第1章「対象資料と研究方法について」は，対象動物として従来の調査研究成果から飼養ないしはその可能性が指摘されているイヌ・イノシシ類（カラフトブタ）・トナカイ・ヒグマをとりあげている。そして，各々についてその遺存体（骨角資料）や遺存体を素材とした製品，各種の動物意匠を表現した遺物の資料を集成し編年的整理を行ない，出土状況や骨学的な観察などの多角的分析を通して前記の目的へ接近することを述べている。

第2章「家畜化の定義と動物飼養の多様性」においては，家畜化の定義を取り上げ，厳密な生殖管理がなされているとみなし得るものを「家畜」とし，家畜化の過程にあるが生殖管理の有無や程度の判別ができないものについてはより広義の概念として「飼養動物」という用語を用いることを示した。そして，人間側の

介入による動物側の形質的変化や考古資料に見出される家畜化の傍証に関する問題点にも論及している。さらに，ゾイナーの野生動物から家畜化にいたる段階的分類などを踏まえて多様性のある動物飼養の形態を整理して，狩猟から家畜飼育までを包括した人間と動物の相互関係を復元する上での自らの基準を提示した。

第3章「イヌ利用について」では，純文時代まで遡るイヌ利用の事例を出土資料によって集成，骨学的計測や観察に基づいて分析し，以下の結果を得ている。すなわち，続縄文時代への移行期になると道北や道東の一部で多量のイヌの遺存体が出土する点を取り上げ，第一にこれらの出土状況，年齢構成，傷などから若獣のうちに殺され，肉や毛皮が採取利用されたこと，第二に前代にはこのような事例はなく，後続する続縄文，オホーツク文化の並行期に北側のサハリン中部の文化において認められることの2点から，当該期にイヌ利用が北方地域から導入されたとする見解に達している。また，形質的な特徴が東北地方北部以南の縄文文化とは連絡せず，北方犬，とりわけ道東，サハリンの出土犬に類例が求められることもこれを支持するとした。さらに利用上の点で，オホーツク文化中期以降にイヌの上腕骨に彫刻を施す風習が出現する点について，飼養者のイヌに対する観念的位置づけの変化は認められるが，従来言われている大陸靺鞨系文化におけるウマの類例との関連性は薄くオホーツク文化独自のものであるとした。

第4章「イノシシ類利用について」においては，まず，北海道，サハリン地域が野生イノシシの生息圏外にあることから，出土例は周辺地域から搬入された個体に基づいた飼養であることを指摘している。このうち，縄文時代後晩期に道南，道央にみられる事例は，DNA鑑定により本州から供給されたものであるが，オホーツク文化に盛行する「カラフトブタ」は同じくDNA鑑定から大陸産の個体の搬入であり，前者とは別系統のものであることを指摘した。そして，オホーツク文化においては前期に飼養が開始され，以後，特にサハリンにおいてはイノシシ類の利用が発達し出土獣類の主要部分を成すにいたるが，北海道側では利尻・礼文両島に集中するものの，本島では利用の発達が認められないとした。また，大陸側にみるイノシシ類の意匠遺物の存在や墓址や住居址での出土状況にみる精神生活との関係は，オホーツク文化には認められないことを指摘した。

第5章「トナカイ利用について」では，トナカイの生息圏がサハリン以北に限られること，サハリンにおいても出土事例は少なく，トナカイを象った製品やソリの滑り木も見られないことから利用程度は低く，オホーツク文化期以前での飼養は無かったと推断している。また，北海道側に見られるトナカイ角製品はサハリンからの渡来品と推測している。

第6章「ヒグマ利用について」では，縄文期・続縄文期においてはヒグマの出土量が少なく，被熱した状態の出土例が多いのに対し，オホーツク文化においては住居内に設けた祭祀用の骨塚の構成物として出土し，出土量も多い点で両者の関連性が乏しいことを説いた。また，オホーツク文化においては利尻・礼文両島のようにヒグマの生息圏外にも事例が多くあり，出土例に幼獣の個体が含まれることなどから飼養の可能性を説く見解がある。しかし，著者は飼養の痕跡は乏しく，単発的な一時的保有は考えられるが，基本的に野生の個体を利用したと推定している。

「終章」では，まずこれまでの分析結果とその考察を踏まえてサハリンおよび北海道地域において飼養が確立した段階に達している動物としてイヌとイノシシ類があげられるという判断を下している。その背景として，第一に両種の動物がともに雑食性であり，沿海性の生活形態の中でも餌の供給が比較的容易であること等をあげている。さらに後者に関しては供給地である大陸との文化的交渉網の確立や気候的条件の類似を指摘している。また，オホーツク文化内における両種の動物の出土量にみる偏在性，すなわちサハリンでのイノシシ類飼育の発達，利尻・礼文での両者の飼養発達，道東における動物飼養の不発達と陸獣狩猟の発達はこれらの地域の地理的条件の差とともに地域集団の形成が関わるものとしている。そして，それらの動物飼養がオホーツク文化の盛期に特に発達していることは海獣狩猟という高度の海洋適応の形態が構造的に密接に関わりがあるとし，その要因としてイヌ，イノシシ類が「生きた保存食」として保有できた点を説いている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，北海道，サハリン出土の動物遺存体資料を広く収集し，サハリン側の資料を含め，その多くが自らの手で現地において観察・記録した研究資料に基づくものであり，調査報告書や動物考古学のこれまでの成果を単に収集利用したものではない。この点で，オリジナリティを十分具えた基礎作業に立った成果であることが明らかであり，合わせてロシア側の調査報告等の文献資料も克明に収集，活用した労作といえる。さらにその分析は精微な観察と記録に基づいており，十分に実証的である。

そして，中でも評価できる点として次の点をあげることができる。まず第一に従来看過されていたオホーツク文化における動物飼養が「生きた保存食」の確保の上で機能した点を指摘し，海獣狩猟文化における社会経済的意義を明確にした点があげられる。第二には，動物飼養におけるサハリン，利尻・礼文，道東という地域間の差異を地理的条件の相異を荷った社会集団の違いとして把握したこと，第三として，イヌの系統論において従来「北方犬」などの名称で漠然とした捉え方にとどまっていたグループの中で道東，サハリンの出土犬を明確に特定したことである。このほかにも従来の研究から一歩踏み出し，学界に新たな指針をもたらすと認められる知見が随所にみられる。

他方，仮説の構築には，十分すぎるといえるほどの慎重な面があることも否定できない。たとえば，従来提起されている「飼いグマ送り」の風習の存在については，近年の彫刻類などの示唆的な出土例についてあまり検討を深めないまま資料が量的に十分でないとして単発的な出来事という評価に留めている点，利尻・礼文におけるイノシシ類を折々のサハリンからの生態の供給を主とし，本格的，継続的な飼養の可能性を敢えて考慮に入れない点などがあげられる。

しかしながら，全体として提示したものは当該文化に関するオリジナルな資料を豊富に駆使した研究成果であることは明らかである。また推測の域にとどまるものが多々ある先行研究の提言に確かな実証的裏付けをもって対処し，意義の深い新知見を学界へもたらした点は今後の研究に新しい方向性を与えるものであり，高い評価をあたえることができよう。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。